

目に見えない、 おかしなこと

まだコンピュータが発達していなかった1960年代初めにアメリカはどのようにロケットを設計して月まで飛ばしたのでしょうか。

実は、コンピュータに代わって、計算を得意とする多くの人たちが毎日大量の計算をしていたのです。世界最先端の研究所NASAは人力で支えられていました。そこで働く多くの女性のアフリカ系アメリカ人は差別と偏見の中で毎日を過ごしていました。彼女たちの提案は、肌の色や女性という理由だけで受け入れてもらえず、職場のトイレも白人とは別のものでした。昨年、公開されたアメリカ映画「ドリム」は、そのような状況でも決してあきらめず、常に前を向いて環境を変えていきながらロケット開発を支えた女性たちを描いています。勇気を与えられる、心動かされる作品です。

さて、それから50年以上経った日本で、私はこの4月から新たな職場で働く機会を与えられています。私の働く職場の雰囲気は、すでにこれまで7月号以降のLIBRAで4人の副会長が紹介してくれたとおりです。私の直接のボスにあたる筆頭副会長は、リーダーシップに優れる石黒美幸副会長。私と同期の副会長3人のうち一人は、弁護士会の政策に明るい道あゆみ副会長。今年度の執行部は包容力溢れる安井規雄会長を中心に、2人の女性副会長が原動力になって、さまざまなアイデアを実行に移していっています。残りの海野、坂口、石原副会長、それに私の男性副会長4人は担当分野の問題を吸い上げつつ、解決に向けた調整役を務めている、そんな感じでしょうか。

このように東弁の役員室は、半世紀前のアメリカの状況とはまったく異なる職場環境です。しかし、そこが理想的な職場環境かという点で決まってしまうわけではありません。職員の人たちは、目立たない仕事を献身的にしてくれている反面、彼らの残業時間はきわめて多くなっています。弁護士や弁護士会の社会的役割が大きくなる中、弁護士会の業務は飛躍的に増えてきています。そのため職員の業務量も増加する一方で、その負担は増すばかりとなっています。

従前の理事者の方たちも努力してきたことですが、

副会長 市川 充 (47期)

主な担当業務

司改センター、法廷、会員サポート、業務妨害、研修センター、裁判官の職務情報提供、犯罪被害、住宅紛争、労働法制、公益通報、市民会議、会則改正、照会請求、夏期合研、多摩支部等



職員の人たちのワークライフバランスを実現することは理事者の責務です。では、どうすれば一定の仕事量をこなして充実感をもちながらワークライフバランスを実現するのか。本年度執行部は、それには、生産性の向上が不可欠だと考えて諸策に取り組んでいます。生産性を向上させるためには、チームの中で働く人一人ひとりが考え、工夫を出し合うことが必要です。少しずつでもそれが達成できれば自分たちの成長を実感できる。それがチームとしての、あるいは一人ひとりの働き甲斐になっていく。働くことが楽しくなる。その結果、労働時間を削減してワークライフバランスを実現する。これを目標とし、Toben Productivity Project (TPP) と名付けて推進しているところです。

誰でも時間をかければ「いい仕事」ができます。しかし、育児や介護、家族との時間、自分の勉強など、仕事だけに時間をかけられない人もいます。その人たちが評価されないのはおかしなことではないか。これを変えていこうというのがTPPの目指すところです。その結果、労働時間の削減による会財政の健全化も図られることとなります。

私たちの日常には当たり前のことと思われていて、目に見えない、あるいは気づかないおかしなものがたくさんあるように思います。50年前のNASAの研究所では、肌の色によってトイレを分けることがおかしなことにも誰も気づきませんでした（気づいた人がいてもそれを言い出せず改善できませんでした）。現代社会で「いい仕事」をしたと認めてもらうために、自分の健康や自分の家族を犠牲にしてまで長時間働くということは決して当たり前のことではありません。私たちはそのおかしなことに気づいて変えていかなければならないと思っています。

冒頭の映画の原題は「Hidden Figures」。コンピュータに代わってロケット開発を支えた「隠された人たち」とか「隠れた数字」という意味。しかし、実は世の中には見えていないおかしなものがたくさんある、意識を変えればそれを一つひとつ変えることができる、そんなメッセージなのではないか、東弁の中に入ってから思えてきました。